تاریخ

白秋全集

24

詩文評論

10

白秋全集24　第二三回配本（第Ⅰ期　一～二四巻）

一九八六年一〇月六日　発行

定価三四〇〇円

著者　北原白秋

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二―五―五
株式会社　岩波書店
電話　〇三―二六五―四一一一
振替　東京六―二六四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 北原隆太郎 1986　Printed in Japan

ISBN 4-00-090964-9

目次

『短歌の書』

短歌本質論……五
定型短歌論……六
短歌鑑賞論……一五
短歌と信念……二三
自然観照我観……三一
律動生々論……三八
詩魂常住論……四五

多磨の書……四九
多磨宣言……五〇
多磨綱領……五三
多磨の精神に就いて（五三）
多磨の風騒に就いて（五四）

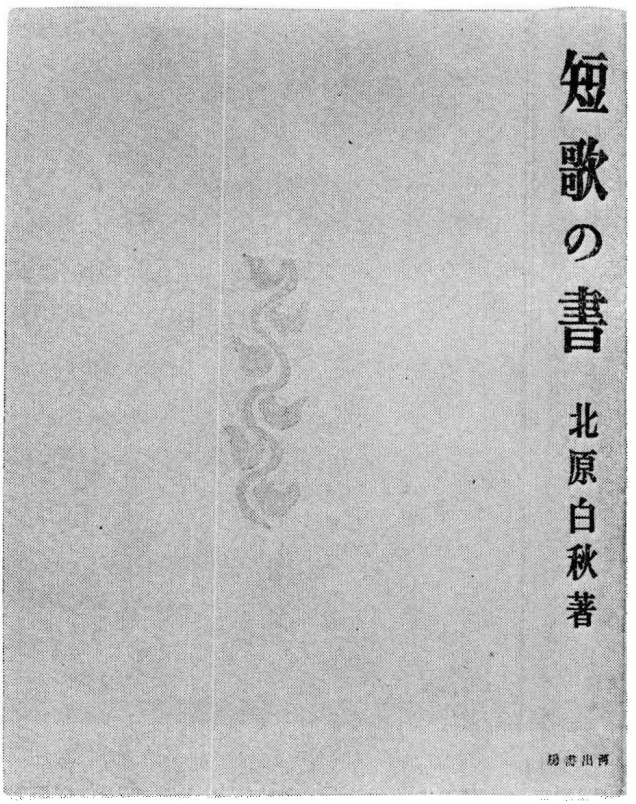
再び多磨の風騒について(五九)　多磨の機構と表象(六一)
短歌心縁……六四
多磨綱領について(六四)　多磨の浪曼精神に就き(六六)
多磨の精神と態度……六八
知命を踰えて……七一
多磨一家言……七五
多磨の書……八四
薄明に坐す……八八
多磨第一環状線……九五
多磨の集団……九八
多磨第二環状線……一〇一
多磨第七年……一〇四
歌道一夕論……一〇七
詩歌の道……一〇八
本格の修業……一一〇
感興と生活……一一三
定型一夕論……一一六

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

詩歌の修業……一三
白南風擦筆……一三三
鼠の口述……一四〇
口　述(一四〇)　添削について(一五〇)
歌を聴く(一四一)　自　力(一五三)
多作と寡作(一四三)　消された歌(一五五)
『夢殿』校正問答(一四六)　六角堂について(一五六)
白秋歌話……一五七
晨朝歌話……一五八
孟夏警策……一八五
新秋歌話……二〇七
作歌の体験……二三七
作歌の実例……二三八
一　紀行と短歌(二三八)　四　定石のこと、字余りのこと、押韻のこと(二三三)
二　短歌と童謡・民謡・自由詩(二三三)　五　同音、同行音の諧調、並びに踏韻(二三九)
三　擬音について(二四二)

六　言葉の音楽について（二六八）
七　静と動との写生（二七五）
八　短歌とスピードの問題（二八一）
季節の歌の作り方……二九八
一　序（二九八）　四　冬（三一四）
二　夏（三〇三）　五　春（三一六）
三　秋（三一〇）
九　観照と境涯（二九二）
一〇　補　遺（二九五）
朱筆の跡……三二
添削実例……三三
照準抄……三四一
一　照準抄（三四一）　二　砥石音（三五四）
後　記……三五七
後　記……三五九

『短歌の書』



〔表紙〕

〔昭和17年3月20日　河出書房刊〕

短歌の書

北原白秋著

河出書房

〔本扉〕

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

短歌本質論

定型短歌論

短歌はいふまでもなく三十一音の定型を本格とする。時により多少の破格に出づることはあつても、其の基調とするところは飽迄も三十一音の定律である。此の本格を厳守し、此の定型の中に正しい整調を行ふ、斯の道こそは短歌としての唯一つの道であつて、其の修道者は又、飽迄も伝統の精神と形式との上に依拠し随順すべきであらう。

少くとも、わたくしは斯の道を行ふことに無上の喜悦を持つてゐる。此の定型の伝統と美徳とに対し、わたくしは常に謙虚に、常に良心の祈禱を献げて、些かも之を傷けようとは思はぬ。事毎に未熟なわたくしは、斯の道に順ひ、斯の苦業に堪ふることの真実を誓つてゐる。信念と感謝とを以て、此のことは言へる。

本来、わたくしは年少にして短歌を弄び、更に詩作に移つた。一時は専ら洋脈の新詩風に没頭し、歌作からは稍ゝ遠ざかつたこともあつた。併しまた折ふしは小詩型の短歌を緑の古宝玉として之を磨いていつくしんだ。新感覚的手法の『桐の花』の短歌がそれであつた。わたくしの詩作は文語或は口語の雑多の新形式、又は現代の自由詩、口語歌、短唱、童謡、民謡、国民歌謡、新詩文等に及び、児童自由詩の啓発に

まで進展して行つたが、かうした世界の自由さから、しばしば、然りしばしば、わたくしは寧ろ佶屈であるべき古い短歌の定型に切実な郷愁を感じた。第三歌集『雀の卵』の後期『葛飾閑吟集』時代は、其の創作と推敲とに骨を削る思もした。短歌に得たものを詩に、詩より得たものを短歌に、かくしてわたくしの交響楽をいつかは完成したい所願ではあるが、兎もあれ、現在に於ては、未来の新詩境の展開を思ふと同時に、端厳なる短歌の三十一音型に対する執着と修道心とが愈ゝ増々深くなりつつある。此の古形式を如何にして鮮新に生かし、如何にして独自のものたらしめ得るかといふことである。わたくしは自己の芸術の最高峰の一つとして此の短歌の嶮嶽を攀ぢつつある。最も潔癖な守持を以て、わたくしは此の芸術に敢て自らを挺したいと思ふ。之より観れば本格の詩以外、諸種の歌謡作の如きは、さのみ自らに高しとは思へないのである。

此の短歌の定型は如何にも簡潔である。しかしながら同じく和歌の一体である他の小詩型に比して、如何に此の短歌の定型が蒼古にして常に清新性を輝かしてゐることか、如何に又気品高く、音律に微妙に、句々が均整し、首尾完美し、外に張つては円かに、而も内に満つることの如何に深いものであるか。また其の定型の中にあつて、内律に伴ふ表現の多種多様に驚かれるか、一見不自由であるべき小詩型の中に如何に広大の天地が又伏蔵されてあることか。其の永遠相等に就いては、少くとも斯の道にいそしむほどの人々には容易に肯かれることと思ふ。而も斯の道は入り易いやうで行くに従つて難く、登るに従つて愈ゝに奥が深い。なまじひに其の形式が円満具足であるだけに、行ふにそぞろに心胆の寒きを覚えるのである。

わたくしの諸種の詩作の体験に徴しても、此の短歌の技法を遣ることが最も難業に感じられる。一つには短歌のみの専門の作者と違ひ、他の各種の詩形に就いても配慮し創造もしつつあるわたくし自身には、此の形式に潜めて心を統一することに容易には馴れ難いのである。その為に却つて又常に清新に此の定型を触覚し得る悦びをも持てるのであらう。苦しみに苦しみ、推敲に推敲を重ねることも、畢竟は斯の道に遊ぶ者のみが知る楽しみでなくて何であらう。此の推敲の楽しみは何から来る。極めて小なる限界と伝統の重圧、規約の厳格と技法の至難、さうしたものから、語句の味覚、調律の愉楽、完成の快感は蕩揺するであらう。惟ふに其の一音一音の連鎖に於ける精緻なる神工の玄微に到つては、かの高等数学に於ける以上の頭脳を要する。彼に於いてはXもYも答は出よう、是に於いてはこれで全しといふことはないのである。ただに直感を以て其の完成の楽しみを味ふのみである。而も此の完成の快感はかうした小詩型のみに得られる法楽であらうか。磨きぬかれた一個の美玉を触撫するそれにも似て、それはいみじきかぎりとも思はれる。長篇の詩に比して小詩型の有り難さは茲にある。

小詩型であるが故に言葉を惜しむ。隠約の徳がここに生じ、気品が匂ひ、余韻が残る。此の短歌のごとき定型の中に言葉を惜しみ、手技を磨くことは、とりもなほさず心法を錬ることである。気品と香気とはその心の奥床しさから来る。慎みとたしなみの底から来る。人の目にも立たぬ深処の苦労から来るのである。重圧は反撥力を生む、窮すれば通ずる。苦業に苦業は積むべくして初めて光るものであらう。かの初めより奔放自由に行ふ自由詩のみの作者は、措辞に粗慢にして渾厚の相を欠き、気品に澄まず余情を引くこと尠い。偶ゝ本格の詩歌を作れば、姿態くづれて見るべくもないのが多い。これを思はなければなるま

い。

本格の定型に於ける修業は、飽迄も道を道として徹すべきであらう。素描の精確は絵画道の根本であるごとく、心を据ゑて動きの無いといふ際までは縦に格を破るべきでない。要するに日頃の練習である。一時の小勇は粗暴を来し、粗慢は軽薄を招く。跳躍すべき力を蓄へずして跳躍することは傷害を大ならしむるばかりであらう。之等は愈ゝに洗煉し鍛冶する時に、遂に完全なる形態に還らねばならぬものである。荒彫の稚拙は鍛錬の上のことである。初心者の為すべきことではない。

茲にまた思ふのに、何事も練習であるといふことである。些かでも他に勝り他に抽んづることは容易ではないのである。かの水泳などの運動競技を観ても日本新記録、或は世界記録を作るといふことも、ほんの一秒か一秒何分の一かの差に過ぎない。しかしながら、ここに到るまでの猛練習の精苦はなみなみのものではないのである。この猛練習を思ひ、この成果を思ふべきである。容易に突飛な跳躍などが為されるものではない。

日夜の練習である。虔ましいかぎりに於いて、儼として芸術良心の上に於いて行ふべきである。

わたくしは初め詩の香気を以て短歌に感覚的新趣を吹き入れることに努めた。後には短歌道の隠約法を以て詩に得せしめたところが尠くなかつた。短歌修道のお蔭は、詩にも童謡にも文章にも及んだ。であるから之等の底には一に短歌の心法が流通しつつあることを思ふ。若しわたくしの諸作に或る気品らしいものがあるならば、それは短歌の上に於いて、深切に言葉を惜しむことの推敲を些かでも為続けて来たから

だと思へるのである。

短歌の技巧に就いて考へよう。

或る人に云はせると、白秋の登つてゆく道は嶮岨でないさうである。果してさうであらうか。わたくし自身には随分と嶮岨の道であると思へる。にも拘らず、他目にはさも楽々と登つてゆくやうに見えるらしい。わたくしは努めて登つてゐる。その歩行の姿勢が楽々と見えるからといつて、必ずしもその道が嶮岨の道でないとは云へぬであらう。

推敲の最上は毫も斧鉞の跡をとどめないところにある。推敲の極を尽して、その仕上に何らの苦も渋滞も見せない、この大事こそは作者としての平生の面目でなくてはなるまい。嶮岨に処して妄りに喘がず、神を澄まし、用意周到に、気を専らにして一歩は一歩と登つて行く、かうした山の精進者は寧ろその苦業を楽しみとする。足がぴつたり地についてゐる。姿勢がくづれない、永続する。健脚にまかし、剛力を恃む者はともするとその身を危険に曝す。短歌の技法上のことも此の理と同じであらうと思ふ。であるからわたくしは慎重に推敲に推敲を重ねる。大才の人ならば兎も角、常凡の徒は努めて楽しみ努めて徹する外に途が無からうと思ふ。縦に自己の稟才を恃み、畏怖することなく、跳躍し暴奔することは禍この上もあるまい。

初めからすらすらと歌ひ下して秀歌を得ることは何よりの悦びであるが、さうした暢達な境地に達する迄には、どれほどの艱難に堪へ、どれほどの試煉を経なければならぬことか。決して容易な修業でできる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com